

# 『大学論』座談会

## Symposium on the Function of Japanese Universities

参加者：渡邊史夫、外山 義、古阪秀三、山岸常人、高田 暁  
司会・編集：伊勢史郎

The shape of university is now changing in Japan. This might be caused by the economical depression, the decline in the live birth rate in Japan and the economical globalization in the world. However, it is possible to adopt another reason such that there is a friction between many social system imported from Europe after the Meiji Restoration and Japanese own culture which has been stored since ancient times and it bursts out. For instance, social science researchers have pointed out that the word "Shakai", which means "society" in Japanese, and "Shimin" which means "citizens" or "civil" in Japanese, do not permeate in Japan. How about "Daigaku", which means "university" in Japanese? Does not it include the same problem as "Shakai" and "Shimin"? If so, because the universities are actually built in many cities, even though "Shakai" and "Shimin" are mere concept, we have to reconsider the definition of the university system; otherwise it would be impossible to maintain the system. Kyoto University is at a distance from the center of Japan, then it makes us view the situation objectively. Furthermore, as a member of the field of architecture, which has absorbed and has traversed a lot of other academic fields, we are responsible to indicate the next stage of Japan. Therefore, we planned a symposium titled "What is the definition of Daigaku".

### 1. 大学生活

司会 今、「大学」というシステムのあり方がさまざまな方面で問われています。その原因を探ってみると大学という社会システムが日本では歴史的に曖昧な定義のままシステムとして出来上がってしまったのではないか。つまり曖昧なままなんとなくきてしまったものを、今はっきりと社会システムとして定義しなければいけないという状況にある、と私は理解しています。大学をどのように定義すべきかというところまでは、私自身もすぐには答えられないのですが、その定義は個々で違ってくると思います。そこで最初に自己紹介がわりに、皆さんの大学生生活の過去から現在までの流れと、大学をどのように定義すべきかということを踏まえて御意見を頂けるでしょうか？

山岸 大学に学生としていた時代を思い出してみると、必死で受験勉強して何とか入ったわけですが、その反動で非常に怠けていたところがあって、いまだにそれが悔やまれます。ただ当時はまだ大学紛争が終わったすぐ後だったので、学生を締めつけるということはあまりなくて、特に私がいた東大の都市工学科は、その学生運動の最先端をやっていたリベラルなところだったもんですから、学生をしめ上げることはほとんど無いという環境の中に入っていました。ですから必須科目も僅かしかなくて、選択科目は全部自由で、自分の学科でとってもよいし建築学科でとってもよい。それどころか他の学部に行って何単位とってきても構わないという枠組しかなかったんですね。それが一般論としていいのか悪いのかはよく分からないんですが、少なくとも私個人としてはすごく幅が広がるような勉強ができた。工学部の都市工学科の中だけではできないいろんな学問を学んで、結果としては色々紆余曲折を経ながら、建築の歴史を、しかも従来の意味での建築の歴史ではない、新しい観点から捉えていくという、そういう筋道をつけるような土壌ができた。個人的にはそのような自由度がよかったという感想を持っています。その半面、いろんな途中の苦労っていうのもあるんですけど、そういう体験を経てきた自分自身が今度は教師になって大学に来てみると、非常に厳しい枠組の中で学生が学ばされてるという状況を、目のあたりにするわけで、それはある種の驚きと同時に、非常に恐ろしい感じを覚えるわけです。非常に限定された科目の中からしか単位がとれない。そこからはみ出そうとすると手続きが面倒だ。そういう中で、一体どういふ新しい発想が出てくるのかといった危機感を大きく持つようになりました。こうした差異が生じ

ている原因は大学が違うとか、学科が違うとか、もちろん時代が違うといったいろいろな要素があるわけで、特に目的的に世の中の組織が動いていく時代になったときに、卒をはめてその中できっちり積み上げていくというのは、効果的な教育、あるいは学問の方法だろうとは思いますが、そのことがもたらしてる弊害っていうのは、今社会の中でも顕在化しているような気がするんです。そのような点をもう少しはっきりさせて、あるべき大学っていうのは何かを、こういうところで一つ議論してみたらよいと思います。

高田 私は大学に1回生として入学して9年経ちます。大学でスタッフとして働くようになってちょうど2年になるので、むしろここ10年では学生生活の方が長いです。それで自分が大学を見る角度がここ10年で激しく変わってきたわけですが、その中で非常に興味を持っているのは入るところなんです。つまり大学に入学する部分で、高校生が入学試験を受けて大学に入ってくるときに「大学になぜ行くんだろう」と考えると思うんです。同時に大学の側もこういう学生に来て欲しいというのがあると思うんです。それが入学試験の問題の内容という形で現れているのかも知れませんが、高校生が大学にはいってくるプロセスを考えることによって大学が何なのか、また逆にその大学がどういうものを目指しているのか、あるいは建築学科がどういうことをしたいのか、そういう問題が全部含まれているような気がするんです。そのところに非常に興味を持っています。今日はそのあたりについてお話ができればよいなと思います。

外山 私の場合は、今大学というところに居るわけですが、私自身のシナリオの中に大学の先生になるというシナリオはありませんでした。そもそも大学に入るということは、そのこと自体が自己目的として高校生のときにあったというよりも、私の場合建築家になりたいという気持ちが既にそのときありました。更にさかのぼれば、絵描きになりたいと昔は思ってたんですけども、高校2年生ぐらいから僕は建築家になりたいとはっきり意識していました。ですから建築家になるための勉強のために大学に入ったという思いがあったんですけど、時あたかも学生紛争の時期で、東北大学に入ってから三分の二ぐらいはロックアウトされて授業は無かったと思います。したがって教養部のときには組織だった授業をきちっと受けたという記憶はあまりはっきりありません。ただその中でかいくぐりながら単位をぎりぎりとして進級したわけですが、私にとっては早く社会に出たいという気持ちがすごく強くありました。教養部のときは結果的に山岸先生と同様にすごく自由な時間を与えられてたという時間を過ごしたと思います。

実は法学部の宮田光雄先生という政治思想史の先生がおられて、西ドイツの精神構造が御専門なんですけども、御自宅で読書会を日曜日の午後やっておられたんです。参加者はほとんど法学部の学生ばかりだったんですがそこで課題図書として与えられたマックスウェーバーとか、エドワード・ホールの「隠れた次元」とか、それからエーリッヒ・フロムの「自由からの逃走」とか、そういう想像力を刺激されるような本をそこで随分読まされました。そこの4年間で僕にとって財産になっているような気がします。学部が上がってからは建築が本当に好きで、図面を引いたり設計の真似ごとみたいなことですけども、それがすごく僕は好きだったもんですからとても楽しかったです。その後大学を卒業してすぐ設計事務所に入ったんですけども、その後の私は7年サイクルで世界が変わっているんですね。設計事務所に大体7年半ぐらいいまして、そこが医療施設を専門とする事務所だったものですから、主に病院とか障害を持った方の施設とかの設計をしていました。その中で、自分の中に疑問が膨らんでいく、問題意識が膨らんでいくという状況がありました。それで1982年にそれにピリオドをうって、スウェーデンの王立工科大学に留学したんですけども、結局スウェーデンには7年間いてそこで高齢者の住環境の研究をしました。戻って来て厚生省の研究所に入ってそこにやはり7年間いたんですけども、帰国した1989年がいわゆる「ゴールドプラン」がでた年で、あと「寝たきりゼロ作戦」などの厚生省関係の激しい動きの中にいきなり巻き込まれました。そこから東北大学に移ったのが今から3年半前です。私は今日の参加者の中では大学での職務に関して一番経験の浅い人間だと思います。したがって、今日のテーマに関しては、大学の内側に自分の身を置く者として歴史を振り返るとか、自分の周りを見渡すっていうような立場よりも、ここに至る自分自身の道のりからしか話をするにはできない訳ですけども、今大学という場が社会とどういう関係で結ばれているのかとか、私達がこの社会にあって大学で建築を教えるということ、研究するということがどういうことかとか、そういうことについて少しお話ができればと思っています。

渡辺 私はずっと京都におりまして、昭和42年に京都大学の建築学科を卒業して、昭和47年に助手になって以来、一時4年間ぐらい環境地球工学専攻の助教授をしていた頃がございまして、建築学専攻のほうにおります。大学にはいった頃は、丹下健三とか有名な建築家がたくさん出てきた頃だったんです。物作りが好きだったし凝り性だったから、建築でもやってみようかなと思って建築を受験したら、たまたま通ってしまったということがあって建築に入りました。ところが何年間かやってたんですけども、なかなかデザインというのは難しい。うまいやつはうまいし、下手なやつは下手やと。練習してもあれは上手ならんということにある時期気づきまして、それじゃあ数理的で答えが一つしか出ないものをやったほうが私には向いてるんじゃないかと思って構造のほうに進んだというのが、大学の中での一つの転機になったわけです。それと同時に大学に入ってからワンダーフォーゲル部に入って、6年か7年ぐらいはクラブ活動していて、登山などを主な業務にしてい

たんですけども、大学の勉強もさることながら、やっぱりクラブで得たことが一番大きかったです。山登りしているとやっぱり色々苦しいことがあるわけです。苦しければ苦しいほどテッペンに立ったときの喜びは大きいとか、またすぐに苦しかったことは忘れるとか、あとキザな言い方ですけど「俺がおるんだ」という存在を感じるとか、そのようなことを身体で分かったというのが一番の収穫だったんです。人間やればできる、苦労はほとんどやるべきや、苦労すればするほどいいものになるし、後で充実感も大きい、というようなことを身体で学んだというのが学生時代の唯一の収穫です。

それから昔は講義は少なかったです。今はとても多いですけども、昔は適当に出とれば単位はとれるという感じだったので、学校にもあまり来なかったし、3ヵ月か4ヵ月ぐらい学校に来なかったと思います。それでも単位が取れるというぐらい非常にゆったりとした状況に大学がありました。例えば構造力学の講義なんか1年間で教えて頂きましたが、少し遅れたら夏休みに出てきて4、5日勉強すれば追い付けたかね。そういう非常にゆったりとしたペースで教えてもらったので、今のようにぎゅうぎゅう詰めで猫も杓子も講義するというような時代ではありませんでした。そういう意味で随分余裕がありました。だから僕は本当はその方が良いんじゃないかと思うんです。ありとあらゆることを教え込むよりも、自分で学ぶという気が起きるように適当に教える。全部教えない。その方が僕は良いんじゃないかと今でも思っています。そういうところで育ってききましたので、今のような講義の形態、毎週朝から晩までつまると、こう言うと失礼ですが各先生方が1個か2個教えてると、教えすぎじゃないかと私は思います。

あとはもう学生に常々言っている事は一つだけです。「自分で新しいことを見つけなさい」、「たくさん見つける必要はありません。一つだけ見つけなさい」、「それであなたは修士も合格いたします」ということを常々言っております。

あと大学がどうあるべきかというような話ですけども、やっぱり工学という立場に立てば、やはり物質的な豊かさを与えていくということになるだろうとは思いますが。しかし少し見方を変えると、人間というのは色んなものを知りたいかというか、理屈無しに知りたいかですね。やはり知的な要求を満たしてあげるというのも大学の使命の一つかなと思っていて、例えばアンドロメダ星雲が何万光年先にあつてね、どんなふうになつていわれても、多分生活のたしには何もなりませんよね。でもそれを知りたいのは人間ですよ。そういうことをやっぱり大学が教えてあげるのが非常に重要な使命じゃないかというふうに考えております。ですから物質面と精神面の両方の豊かさを与える使命があると思っております。それで最後に教育が一番大事だと思っております。

古阪 僕は建築を是が非でもって望んだわけでもないんですけどね、まあなんとなくっていうほどズサンでもないんだけど、やっぱり京都の建築に対してのなにがしかの憧れってというのがあったと思います。僕はあの紛争の次の年の昭和45年に入ったので、京大はまさに一番賑やかな時代の末期でした。半年くらいは講義が無くて、遊ぶ人もいたんだけど、我々は毎日真面目にクラス討論っていうのを朝から晩までやって、民青、全共闘、色んな連中と、ある意味じゃ仲良く議論したわけです。一方それぞれの中では、殺し合いに近いような喧嘩もあったんですけど、そういう非常に荒れた時代を経験したんです。そういう中で議論するっていうのが相当に意味があるっていうのを学んだっていうか、自分の意見と対立するような色んな連中と議論することによって相手の気持がよりよく分かるということ学んだと思います。だから、ほとんどの連中といまだにつき合いがあるわけですけども、そういうのが強烈に覚えている大学の印象です。入学試験はバリエードの中をくぐって入ったわけですが、それでも半年経ってから徐々に講義が始まって、僕は是が非でも建築っていうほどには感心を持っていないということもあって大学では色んな授業を受けました。それは単位が欲しいというよりも自分の意見を評価してほしいというような意味ですね。ですから民法などをかなり詳しく勉強しましたし、経済も、京大が得意なマルクス経済学だけではなく、近代経済学や農業経済の講義とか、色々学びに行った記憶があります。

その中で数学とか、要するに理数系の先生一部かもしれないけどあまり講義に熱心でないと思いましたがね。我々が講義をうけにいても、君らは頭がいいんだろうから講義なんかに来ずに、自分で考えるというんですね。だから数学関係はかなり独学でやったっていうような教養時代ですね。そういう中で建築に来て、やはり興味がどんどん湧いてきたということで、一時は設計をやろうかなと思ったんですけども、それもおもしろいけどもう少し幅の広いこと、特に実業の世界で勝負しようという風に思いました。4年生で研究室に入ったときに、大学院はなまっちょろいから俺は卒業すると、早々と宣言して、そのかわり社会で勝負しようやっていう、一種喧嘩腰の学生時代を送ったんですけど、結果的にまあその通り大学を4年生で出て現場に行きました。

現場も非常におもしろくて、僅か2年間ですけども、そこで得た人のネットワークとか知識とか経験っていうのはいまだに生きてます。やっぱりものに触れる瞬間っていうのは非常に大事なんだなあというのがあります。その間、大学にチョコチョコ遊びにも来てたんですが、何故かよく分からないんですけど、大学に入りにくいんですね。敷居が高いっていうわけでもないんだけど何か入りにくい。それは何だろうかって考えてみると、「お前は勉強してんのか？」っていうことを問われてんじゃないか感じていたんです。その辺が僕にとっては、大学

がどうあるべきとか、あるいはどういうものかを考える手がかりになるのではと思っています。それでやっぱり自分が社会に出て経験したこともあるからというのもあるんですけど、大学と社会の関わりっていうか、大学の研究あるいは教育っていうものと社会の関わりっていうのはどうあるのか、あるべきなのかっていうこと、それを考えることが私にとっての大学論というような風に思います。ですからそういう点で、今日の議論も少しそういう方向に行けば、更に言えば今の、忙しい時代だからこそ、十年じゃなくて二十年くらい先を見て、この建築学科、あるいは建築教育のあり方ってというようなものを考えられたらいいんじゃないかという風に思います。

## 2. 「ゆとり」と「なまけ」がもたらす創発力<sup>(1)</sup>

司会 どうもありがとうございました。皆さん大学時代はゆっくりとした学生生活を送ったという感じがします。今の流れを見てると、昔は大学時代にあったモラトリアムの時代が、他の世代に移っているのではないかという気がするんです。例えば、ゆとり教育というのが小学校で最近さげられていて、今日はそこまでは立ち入らないようにしましょうと思うんですけど、皆さん大学時代にそのような余裕あるいは「ゆとり」の中から学んだことが多かったという雰囲気をご自己紹介の中から感じました。そのあたりで意見がありますでしょうか？

渡辺 ゆとり教育となまけ教育は違うと思うんですね。僕等にはゆとりがあったと言ったんですけども、全てのことを人間完璧に学ぶということはできないんですね。でも一つのことでも頂点まで学びますとね、自然と周辺領域も見えてくるということあるでしょ。ですから、そういう余裕を持って学ばせる必要があるということも言いたかったんです。難しい数式を一杯教え込んで、そしてあれもできるこれもできるというのではなくて、その講義のレベルできちっと理解させて、その分野の中でも一つだけでも完璧にマスターさせる。そうすれば周辺は自ずから広がっていくんじゃないか。そういうゆとりが必要だと思うんです。

古阪 昔はほとんど必修だったでしょう。選ぶ権利が無かったんじゃないんですか？選択科目はむしろ少なかったんじゃないですか？

渡辺 数が少なかった。だから必須の構造をきちっと学んでおけば後はいくらでも応用が出来るわけですよ。モノを考えるっていうことが身につきますからね。考えるよりも前に覚えるというのが今の講義ではどうも先押しするように思いますけどね。

司会 それはでも学生の主体性によっても違ってくるんじゃないかと思うんです。学生が、自分はどういう分野で頂点を究めるかということがはっきりしていれば、かなり効果があるとは思うんですけど。

渡辺 やっぱり教える側の責任もあると思いますよ。学生がほんとに理解してるかどうかキチッとチェックしてやっていけば、それなりのものになっていくんでしょうけども、今そういうことが完璧になされているとはなかなか言いがたいですよ。

山岸 ただ私はちょっとそこで思うのは、先生の言われるような「ゆとり」と、「なまけ」の両方必要だと思うんですね。「なまけ」をしてるとあるとき気がつくわけなんです。「これはいけない」とかね。「俺は大学の4年間で何かしないと」っていう気くらは起ってくるんですね。そのところで先生の言われるような「ゆとり」のある教育、あるいは学習ができるとすれば高いところにもいけるし、広がりもできる。一方だけではやっぱり偏ってしまうんじゃないかなという気がするんですね。

外山 今、二つのキーワード「ゆとり」と「なまけ」で話しが展開してますけど、「なまけ」っていうのが大事だとすれば、「あるとき気がつくって」いう内側からのモチベーションがわいてきて次の行動に移る、つまり内在的なモチベーションがイニシアチブを取っていくっていうメカニズムを生むんだと思うんですよ。「なまけ」っていう時空が無いとね、結局いつも先手先手で道標を置かれて、にんじんを置かれてるように導かれていくだけだと。本人が忽然と何か気づいたり、発見したり、知的欲求が突然湧いてきたり、そういうことってなかなか今は経験できないんじゃないですか？だからそういう意味で「なまけ」っていう、あるバキュームな状況に入れる予っていうのはものすごく延びますよね。反対にいつもいろいろと言われるのに慣れている子は、そこそこのレポートを出してきたりしますけども、そこを越えられないためにこちらが困らされるようなことになるんです。渡辺先生から「なまけ」っていう言葉を聞いて、そこに何か重要な鍵があるように思ったんですよ。

山岸 その通りだと思いますね。やっぱり自分が内在的に自発的にどうしようかって思わない限りは、どこにいても始まらないわけですよ。教えられることだけは覚えるかも知れないけれども...

渡辺 僕が言ってる「なまけ」っていうのは、自分が何しようかとか考える以前にね、もう何にもしないという学生、つまり無気力な学生が多いですよ。

山岸 最初の段階はそうなのですが、それをしばらくやっているとやっぱり意志が出て来るわけですね。それが例えばスポーツしようということに向くかも知れないけれども、大学生である限りは自分のいる専門のところで何か関わっていきこうという気が起きてくる。その意志が起きて来るのが大事だ、と僕は思うんです。

渡辺 そういう気を起こさすような教育体制にせないかんちゅうことですよ。

古阪 でも、そのような余裕が奪われているように見えるけれども、結局そうでもないんですけどね。

山岸 まあ今の学生も結構自由にやってますけどね。

古阪 やっぱり昔の余裕っていうのは、他に楽しむ術があまり無かった。それが今は他に楽しむ術の方が多いから、余裕を与えてポウっとしている時間を持たせるとそちらに走ってしまう。

外山 違うもので時間が埋まっていくかも知れないね。

山岸 ほんとに怠けるだけで終わったり、怠ける忙しさがあったとか。

古阪 それはそれでいいと思うんですけどね。ある時期を境に熱中しはじめるというのでも構わないと思うんであればね。ただそういうことに気がつく、それでいいんだっていう生き様の教育が必要だと思いますよ。渡辺先生がおっしゃったように、我々もゼミなどで言うことは何か考えるということです。何でもいからとにかく口で喋るだけではなくて自分で手を動かして書く、一言「あ」でも書くことによって、これはどういう意味か考えざるを得ないと。分からないことでもとにかく書いてみて考えるということをするんですよ。あれを読んできて、これを読んできて、はい報告しなさいみたいなことだと、本当にさっき外山先生がおっしゃったように、「にんじん」みたいな物を次から次にぶらさげられて、それでも60点とか70点は点数とれるけれども、つつ走れないんですね。そのような考えさせる教育というか、それはゼミだけじゃなくて授業としても何かそういう余裕を持たせた方がいいように思うんです。

高田 怠けるっていうのは、人生のいつがいいんでしょうか？先生方はいつ怠けられたんですか。

古阪 僕毎日ある意味では怠けてますよ。そして瞬間に働きはじめるんですよ。

高田 例えば怠けるのにいい時期っていうのは大学なんですか？

古阪 日本の今の教育制度で言えば、やっぱり大学に入った瞬間でしょう。怠けるって言うよりも緊張が緩和されるんですよ。そこで何をするか。非常に大事な時期だと思うんですよ。あと結構大学院もそれがあてはまりますね。

山岸 僕自身なんか学部的时候も大学院的时候もほとんど何の勉強もせずにポウっとしていたから、その後の穴埋めをするのが非常に大変でしたけどもね。

渡辺 いやいや、そういう人ほどこうやってギューと上がるんですよ。

山岸 まあ、ギョッと上がったかどうか、とにかく一定の方向には確かに向かったんですよ。人によっては空白の期間が長い人もいれば、早く気づいてね、動き出す人もいるんでしょうけどね。

外山 ある日惚然と目覚めたあたりの話を、ちょっと。

司会 それはおもしろいですね。皆さんそういう経験があるんですかね。

山岸 惚然とは目覚めなかったんですけどね。僕は大学院まで行って世の中に出ようとしたとき、企業は嫌いだから役人になって自分の少し思うような方向に動かしてみたいなっていう馬鹿なことを考えたわけですね。だけでも役人になってみたら、当り前のことなんですけども、入ったばかりの若僧がそんな大きなところに聞かれるわけはなくて、つまらない雑用をひたすらせざるを得ないわけですよ。それはそれでいいんですけど、自分が何か思ったこと、あるいはそれに関わることで何か知りた、学びたいと思ってた部分は、日々の不満の中でようやく肥大してくるわけですね。ですから今の学生さんに比べたら気づくのがずっと遅いわけです。それで仲間をつくって勉強会をはじめて、そこで新しい方法を身につけて研究を شدしたわけです。

外山 多分そのときに社会に接点を持っているなかで、そういう自分の知りたいことが欲求となって、次第に膨らんでいったのではないのですか？

山岸 少なくとも僕にとっては役人をやってるっていうことが、何か自分自身の存在や自分の考えるものを表現できる場ではなかった。むしろ研究をやって自分の考えを表明していくしか自分にとっては手立てが無い

んじゃないかという風に思ったところから勉強を始めたんですね。もちろん役人をやりながら自分の世界を作っていくことも可能ですし、まあそういう風にやってる人だっていっぱいいるわけですけど、僕自身としてはその道はどうも無理だなと、いう風に思ったわけですね。

司会 私の場合もそれと似てる部分がありまして、一回大学を出て修士課程に入る前に働いていたんですね。楽器のメーカーで研究をしていたんですが、会社が研究室を置かないという方針になったために、研究を続けたくて会社を辞めて早稲田大学の修士課程に戻ったわけです。そのときにやっぱり突然、目を見開いた瞬間だったのかなと、今思うんです。そのとき社会の構造というものが分かったと思ったんですね。今考えてみると全然分かってなかったんですけどね。そのとき思ったのが「社会ってこんなものなのか」っていうのがあって、次に「こんな社会だったら自分はそういう位置づけではなくてこういう位置づけになりたい」というような全体が見渡せたと思った瞬間があったんです。そのような瞬間はその後の人生でも何回か経験するんですけど、それが一番最初の時だったんですね。大学時代には社会のことを知りたいと思いながら勉強していてもまったく見えなかったんですが、実際に自分が2年間働いてみてそれが分かった気になった。やっぱりそういう全体の社会の中に自ら含まれて、全体が見えるようになったのではないかと思うんです。大学でそのような経験ができれば、つまり大学在学中に社会全体の構造が見えて、自分がその中でどういう風に位置付けられれば良いのかを、大学時代に見つけられれば良いなと思うんです。

外山 それは難しいでしょう、無理でしょう。その社会が見えるっていうふうに表現したその「見える」っていうのは、多分頭で見てるんじゃないんですね。恐怖感とか辛さとか無力感とかそういったことも含めて身体全体で感じてるんだと思うんですよ。それで「見えた」と感じる回路のどっかが作動するんですね、きっと。僕の場合も結局設計事務所にて7年いたわけで、そのときにものすごい忙しくて寝てるんだか寝てないんだか分からないような状況もあったりしたんです。結局、そういう中で解けてない明らかになってない問題、本当にそれが良い解答かどうか分からない問題を考えたり掘下げたりする暇もなく、仕事はどんどんこなしていくわけですね。そういう状況が続いていくとね、恐怖感っていうかな、自分がこんなことしてたらダメになっちゃうっていう感じになるんですよ。その片方では、「このことについてはどうなっているんだろう」、「これは何なんだろう」という疑問ばかりがどんどん膨らんでくるわけですが、そのような疑問は多分大学では膨らんでこないんだよね。

山岸 大学生という身分においてね、その中に安住して社会をちょっと見てみましょうではダメなんですね。やっぱり大学生と身分を外れて、社会の一員である、給料を貰って働くという場になってみると、全体ではないにしてもある種の社会が見えてくる。そこが大事なんで、多分大学教育の中で、それを大学教育の中でやろうと思うのは無理があって…

司会 そうなんでしょうかね。

外山 僕がそのときに一番思ったのは「やっぱり大学に戻りたい」ということだったんですよ。今は社会人で大学院に入り直すことができたり、いろんな方法がありますけど7年設計事務所にて大学に戻ってそうたやすいことじゃなかったんです。たまたま僕は大学では高齢者や障害者のことを卒論、卒計でやって、以後の設計事務所でもその延長線上で仕事をしていたので、スウェーデンのことが気になったりして資料集めたわけです。それが結局、留学というふうにつながっていくわけですが、そのように大学に戻って勉強するチャンスが与えられるっていうことがすごく大事だったと思います。そのときに本当にモチベーションが掴めてるわけなんですよ。だから、学び方が全然違うし、本当に良く勉強しますよ。

古阪 ちょっと場面は違うけど、自分の経験もそうですね。僕ももろに建設現場にいたわけですけども結構おもしろかった。決して嫌ではなかったんですけど、現場は繰り返してでしょう。同じことやって同じ失敗を繰り返しても技術の蓄積とならなかつたんですね。何か違う方法があるんじゃないのかというのを段々と思うようになったんですね。それでも現場の権限で言えば、主任っていうのはいくら間違ってると思っても、ひとこと言うのは難しかった。まあ負けはしなかったですけどもね。

外山 そういう社会の複雑さが分かってくるわけでしょう。

古阪 だからこんな馬鹿なことは無いはずだと思っていたんですが、それが経験談で終わってしまうんですよ。それがどうもおかしいっていう風に思ったんです。それでたまたま大学に戻るチャンスがあって、そのとき芦屋浜プロジェクトという大団地建設の生産システムを自分で考えて調査するというのがあったんです。これ幸いと現場で思ったいろんな問題を一举に確かめる実験台を得たわけです。3年か4年間のプロジェクトでしたけどね。そこで僕は、今やっているような分野のかなり基礎的な部分をつくったんですね。外山先生とちょうど同じように、これは日本にはないやり方が他にもあるんだと思って、アメリカに留学しようかということも考えたんですね。場面は全然違うんですけども、思ってるところはかなり似てますね。

高田 社会に出る中で自分の問題を見つけるって言うか、モチベーションが見つかるっていうのがあるんですけど、僕はさっきの伊勢先生が言われた「大学でそれが見つけられたら良いな」っていうのに賛成です。もっと言えば高校、中学、小学校でそれができたら理想だなと思ってるんです。無理だという今のお話でしたけども。

外山 いろんなケースがあっていいと思うしあり得るとは思うんだけど、無理って言うのは、そこではかなり主体がかかってるっていうことなんです。たとえば社会に出て生活をしていく中で収入が無くなったり色々苦勞を経験する。設計事務所が小さければそういう状況だってありますよね。それに対して座って居心地の良い状態で「さあ今日は社会勉強に行きましょう。お父さんの行ってる工場を見ましょう」ということで社会を学んでいくこともあり得なくは無い。しかし、あるモチベーションを作動させるボタンを押すためには、かなり深く自分の中に身体化されていく恐怖感とか疲れとかあるいは意欲とかが人間には必要ではないかと思うんです。そうしないと作動しないのではないかと言うことなんです。

高田 それがこう緩く作動するような形があれば、つまり自分が社会に身を置いてその関わりを考えて、その中で「ちょっと大学に行きたいな」と思えるような、そういう仕組みがあると良いなと思ったんです。

外山 あり得ると思うのは、例えばボランティアなんかの形でね、そういうことに出会ったっていう学生は僕は具体的に知ってますし、そこから問題意識が変わっていった学生もいますよね。

山岸 今確かに、小学校、中学校、高校でそういう場面って言うのは増えてきてるわけですよ。社会に出て行って何か体験してみるとか、街の中の問題を探し出してみるとか、そういうことも中学、高校の教育でやり始めているわけですね。ボランティアと称する活動も教育現場の中に含まれてきて、確かにそういう意味では従来の枠組とは違ういろいろな場面がメニューとして提供されるようになって、それはそれで悪いことじゃない。やればいいと思うんです。しかし、実際には自分の安住する立場から離れて別の立場に立って、いろいろな苦勞やら悩みを抱えたときに個々人が内在的にどう動こうかっていうモチベーションが出てくるんだと思うんです。ある種の非常に強いモチベーションが出ない限りは、結局はそれぞれの個々人がある種の目的を持って大きな成果をあげていくという方向にはなかなか向かないんじゃないかなと、自分自身の経験としてはそう思うんですよね。いくらメニューがあっても、それはやらされてることであって、自分がやろうと思えば、無いメニューを探して、あるいは自分でメニューをつくって、そこに身を投じて、苦勞してやっていくってことしかあり得ないんじゃないかなと思うんですよ。

渡辺 それを与えるのは大学の使命じゃないんですよね。やっぱり大学に来て研究しようと言う人はそれを持ってると信じているんですよ。そういうものをここで教育することによって、持たせるなんていうことはなかなか難しいですよ。

山岸 だから大学、例えば京大に来る学生でもいろんな考え方の学生がいるだろうし、大学が違えばまたこれはずいぶんと学生の考えも違って来るんですけども、研究をしようというモチベーションも京大に来る学生はなんとなく持っているかも知れませんね。だけど何となくがそこで止まっているか、あるいは与えられたメニューだけをこなしてそれが自分のやろうと思っていたことだと誤解してしまう。そんな状況になりかねないんじゃないかなっていう不安がある。

渡辺 与えられたメニューってやっぱり選択することが可能なわけだし、自分で何かをやる気にならないとものはできないわけですからね。

山岸 だから、教育の中身にそういうものを盛り込むのではなく、メニューは一杯あるんだけど、サボる時間もゆとりの時間もメニューに入っている、その中から自分が自分の意志である種のメニューを作り上げて、それで進んで行くしかない。大学側としてはそういうメニューを提供しておくだけ。今は提供したメニューをこなすところまで制限をかけてる。

渡辺 それは単位の数とかいうことですか。よそで取って来ても良いんですけど、それは事務手続きとかがややこしいとかそういうことですよ。

山岸 僕等のときなんかは全く事務手続きいらなかったですから、文学部でかなりの単位を取りましたし、農学部でも取りましたしね。

渡辺 それは僕も取りましたよ。美学とか美術とか文学部で単位取りましたけど。

外山 僕も心理学とか取りました。

山岸 今、それを取ろうと思うと指導教官のところに来て、いま研究しようとしてる事と関係があるという理由があれば、ハンコを押す、と言う手続きが必要ですよ。そのこと自体がおかしいわけで、それはその段階では関係なくたって良いわけですよ。他学部で聴講してこようと思ったら全く関係なくたっていいと思う。それがあある時何か影響して来る可能性を持つと思うから彼らはほかの学科で取りたいって言って来ると思うんですよ。それを何か関係が無ければいけないとか、教官がはんこを押さなければならぬって言う仕組みが現実にはあるわけですよ。そのような仕組みが学生の可能性を封じている気がするんですよ。

### 3. 学問と産業社会と大学の三角関係

司会 ちょっと話題を切替えて、先ほど少し話題に出た大学は社会とどう結ばれているのかについて少し議論して頂きたいと思います。学問という軸と、それとは異なる産業という軸、もしかしたら直交してるかもしれない軸上で色々と活動しなければならない。国立大学として国から要請されている大学の機能ってというのは、産業との関わりがだんだん大きな割合を占めてきて、学問という軸に対して非常に圧力がかかってくるような気がするんです。大学というのは学者が集まっているところなんですけど、その二つの目的意識の違う軸でどのように辻褃を合わせていくのかという事を考えていかなければならない気がするんです。そのへんで何か意見ありますでしょうか？

渡辺 大学と産業が直交していると言う発言があったけど、それちょっとどういう意味でしょうか？

司会 学問と産業が直交しているっていうのは、学問は知的興味、長いスパンで考えて自分の理論体系を作るとか、永遠の真理に近付くことを目的とするという意味で、もちろん実学という面もあるんですけど、産業は...

渡辺 でも産業は学問の基盤に立っているんじゃないんですか？

司会 僕もそうだと思っていたんですが、どうも今それが曲げられているんじゃないかって思うところが多いんです。学問というのはとにかく自分の興味のあるところに突き進んでいけば、社会のために役立つものが出て来るっていう位置づけだったと思うんです。ところが最近は単に興味があるというだけでは自由に研究をやらせてくれないような、圧力を感じる事が多いんですね。自分の興味のあることだけじゃなくて、実際にそれが社会でどういう位置づけにあるのかということをもっと最初に説明しなければいけない。単に興味のあることについて走っていいような社会的な雰囲気は僕は感じています。

渡辺 ただレンジの問題かも知れませんが、例えば半導体が発明されて、それが実用化されて、テレビが安く買えるとか、我々の情報が多く得られるようになったとか、そのように学問は産業に非常に貢献して来ていますよね。それが工学であって、必ずしも直交しているわけではなくて、やっぱりお互いに共存していくもんだと僕は思ってますけど。まあ僕の分野だけかも知れんけど。

古阪 工学部の中では建築が一番悩ましいのではないんですか？

渡辺 例えば力学の振動論の研究を一生懸命やっただって産業界からお金ついて来ないわけですよ。ニュートンの力学を覆したっていてもね。そんなもんお金つかへん。でも研究としては大変重要だしね、10年後20年後にはすごく大きな花が咲くかも知れないわけです。そのような場合には更にお金を掛ける必要がありますよね。そうするとさっきおっしゃったような従属型ではなく、私達が価値を見出して、そしてお金のインカムをうまく、研究に振り向けていくという仕掛けを今度は作らないとだめだと思いますよ。まあ全学的にもそうだと思いますけどもね。

外山 哲学とか文学とか。

渡部 大変なことになる。悩ましい。

山岸 現実問題として、僕等のやっような実利に結びつかないなもの。京大全体で言うと、文化系の基幹的な学問ですね。哲学、文学、歴史というような古くからある部分に投ぜられる労力なり、ウェイトなり、人材が先細りになっていくことは明瞭なんですね。学科の中とか学校のなかで、それなりの了解が得られて、お金が投ぜられる可能性が確保されているようなんですけども、やはりそこらへんの懸念っていうのは大きいと思うんですよ。それで、その欠落が貫徹してしまった段階っていうのは、非常に恐ろしい社会になるだろうと思われる。やはり、人間とはなんなのかとか、なぜ生きているのかという根源的な問いかけ無しに現実的な技術だけがつつばしっていくと、色々な危険な事態が生じてくる。原発の事故やクローンとか全部そうなんですよ。全部先端的な技術なんですけど、当然その技術を支えている枠組の中では、目的に沿った成果が得られるわけですが、

その枠組を外れると非常に危険である。そここのところに対する人間としての問いかけなり倫理観っていうのが確実に養われてないと、非常に危険な社会になってしまう。実学でない部分の確保っていうのをしていかなければならないし、京都大学のような総合大学では、殊更に注目しておかなければならない。

渡辺 だから、そういう所に如何にお金を投入できるかがやはり一つの大学のステータスを今後表すものになっていくと思いますね。しかし、工学に関しても行き着くところっていうのはたかが知れてるわけですよ。最後はやっぱり人間自分のこと考えますからね。

外山 そういう意味では、さっき伊勢先生が、したいことが直線的にできないっていう状況とか圧力を感じるって言ってたんだけど、別の角度からすると、やっぱりこう専門的な知識欲求を直線的に追求していただくという状況に閉塞していくことに対する危険をむしろ僕は感じますよね。だから、「善し悪しは別にして」と日本人は良く言うんだけど、問題は良いか悪いかというのが実は一番大事なんで、絶対値の中身だけを議論しようとしてるんだけど、その絶対値の前に+がついてるか-がついてるのかが実は問題なわけですよ。ところが、それをレトリック (rhetoric) でかわすために「善し悪しは別にして」って会議でもなんでも使いますよね。僕は大嫌いな言葉なんです。自分の色彩に対してある種の煙幕を張るときに使う言葉なんですよ。

司会 善し悪しを別にしてっていうのが煙幕だっておっしゃいましたけども、今まさに我々はその煙幕を取り払って、説明しなきゃいけないようになってきている。つまり自分が信じているだけではダメで、それが何故価値があるのかっていうのを説明しなければならぬ。しかも誰にでも分かるように説明しなければならぬ、ということは学問の大衆化っていうことに繋がっていると思うんですね。つまり、これまでは学問というのは、学者の中でだけ分かりあってれば良かったんだけど、これからはみんなが分かってくれるような言葉で表現しなければならぬ。それが直線的に進めないっていう意味だったんです。それがいろんな評価に繋がっていくと思う。

渡辺 学問の大衆化という事ではないと思います。学問成果を享受するのが大衆ということではないんですか。学問の成果が誰の役に立つかと言えば大衆の役に立つ言う意味じゃないんですか。学問の大衆化って、素人さんには分からないこともあるんじゃないんですか。

司会 物質的豊かさは作れば与えられるものだが、知的豊かさというのは表現しないと伝えられない。社会に知的豊かさとして還元するためには、説明が必要ではないか？

渡辺 そういう意味ですか。それは難しいな。分野にもよりますけど。アインシュタインの相対性理論ってありますよね。あれの解説書って山程ありますよね。どれ読んでもわからんですよ。だからきっと結構難しいものもあるんですよ。

外山 分かり易く言うとこれから研究者の研究した成果でも買い手がつかなければそれが成り立たなくなっていくというような仕組みの方向に向かっている。だから買い手がつくためには、内容をきちっと相手に分からせるように、効能書きを説明できないと買い手がつかないと。僕はやっぱり、さっき山岸先生が言うておられたことはとても大事だと思うんです。結局大学が社会の中で存立していて、しかも私立大学と国立大学がちよっと違ったっていうのは、僕なりに意味があったことだと思ってるんですね。最近はその差が段々無くなって来てると思うんですが。かつては採算性を全然考えないでやっておれた学者や研究者のグループがいたわけですよ。でもそれが採算性問われるようになってくるのはまさに独立行政法人化だと思うんです。それによって失うものは何なのかっていうことをやはり良く見て議論しておかないといけないのではないかと。例えば非価値的なものと価値的なものがあるとすると、今まで科学的というのは非価値的で客観的なものである、とすると価値というのはまた違うものですね。例えば宗教とか倫理とか、特に日本では科学の世界、工学とか理学というのは非価値的なニュアンスをすごく強く感じるんです。20世紀から今21世紀に突入しようとしているときに、今この2つの切り結びの問題が浮き上がって来ている、それがパラダイム転換みたいな形で我々に挑戦して来ているような所ってありますよね。例えば環境倫理の問題では、今まで非価値的に進めて来た科学の行方に崖があってその先が無いっていうのが見えて来たときに、社会の中での大学の役割っていうのは別の課題を与えられているような感じするんですよ。つまり産業界の要請というのも社会的要請としてはあると思うんだけど、いま一つの社会的要請として、生活者、暮らしてる側からの要請というのがあると思うんです。

古阪 例えば公害っていうのは、個別企業の中の採算性だけを考えていたからおこった。そこから外部に垂れ流していたものは問題にならなかったし、計算に入れる必要がなかった。でも地域として考えるとそこが問題となる。それが大きくなって、地球環境の問題へと繋がるわけですね。それに対して、こういう問題が起こるじゃないかということで止める側の論理や社会機構などを研究するというのは、今後どう扱われるのか？

山岸 利潤だけ追求することに対する歯止めは産業社会の仕組みの中だけではできないわけですが、その仕組み自体を研究するのではなくて大学の中にいる人間がそういうことを考える素地を持っているかという事が大事だと思うんです。大学の教育の中で確実に必要なのは、バランスの取れた人間としての観念を養うことであり、発想の自由度は保証するべきだが、ある行動をとるのかとらないのかという事をどのように考えているかが大切で、そのあたりがないと大学として存立できない。

高田 それを今まではあまり強く意識しなくても済んだが、今回の独立法人化の話により、意識する必要性が出てきたということなんですか。

古阪 そうじゃなくて、仕組み以前の問題として、倫理観を考えるような教育や仕組みを考える人間が減っていく。

山岸 今までは問題が顕在化していなかったのではなくて、緩やかな仕組みに甘えていた。ただ自由な時間をノホホンと暮らして、ほとんど成果があがらないで、ある種の安定した環境のなかで安住してらっしゃる人間が増えてきたことに対する批判が出て来て、独立行政法人化の話がでてきた。そういう意味での批判っていうのは大学人は真剣に受け止めなければならない。だからといってある種の効率化、営利化というところへ進んでいってはいけない。

渡辺 だからね、大学は恐らくは社会とか産業界ニーズを満足させるために産学関係をして、それで研究費を稼ぐ。そして、それを今度はシーズを育てるために使う。その循環をきちっと作っておけば良いと思います。ニーズで金を儲けて、シーズにつぎこむというこういう構図じゃないかと思いますが。そういう気持でやらないと、総合大学とは言えないと思いますよ。

## 4. 大学論再考

伊勢史郎

大学は12、3世紀の中世ヨーロッパで教会の一部として聖職者養成を目的とした教育機関が起源であるらしい。学生および教師の集団として手工業組合と同じかたちで生まれたためギルドの用語であるユニベルシタス《universitas》(直訳すると組合)と呼ばれたそうだ。阿部謹也氏は「大学論」の中で教授、助教授、講師、助手は親方、職人、徒弟に対応しており、正教授だけが教授会への参加権およびさまざまな決定権を持つというシステムは、職人組合において親方が全ての権利を持っていたのと同じことであると述べている<sup>(2)</sup>。また大学の自治はローマ教皇や領邦君主たちの統制に対して学者や学生がギルド的な自主権を守ったことから発生したらしい。キリスト教との強い関係の元に生まれた大学であるが、やがて大学の中に真理を探求を主張する学者が現れ、キリスト教的な要素から少しづつ脱却していったわけである。一方、「科学」“science”の歴史は「大学」よりも浅いがキリスト教と無関係ではない。“science”はもともと広い意味で「知」を意味していたのだが、「知」を「飯の種」にするというニュアンスで“scientist”という言葉が造られたのは19世紀前半だそうだ。つまりニュートン(1642-1727)は科学者ではなかったのだ。村上陽一郎氏は次のように述べている。“ニュートンが哲学者であったという時の「哲学者」とは、言葉本来の意味の《philosopher》である。言い換えれば「愛知者」である。ただここでの「知」すなわち《sophia》は、ギリシャでのそれとはずれをもっており、キリスト教的背景を強く持ったものであった。つまりニュートンの「愛する知」というのは、キリスト教的な神学に裏打ちされた「知」であった。”<sup>(3)</sup>すなわち、知識を飯の種にするような職能集団というニュアンスで名付けられた“scientist”はニュートンの時代にはいなかった。逆に言えば“神”を目的としないような新しい知識集団が19世紀前半に現れたのである。

このように聖職者の養成を目的とした大学から近代的な大学へという流れ、およびキリスト教における絶対的真理から「科学」“science”への流れはどちらも西洋における「大学」や「科学」という社会システムのキリスト教からの脱却という流れを示している。日本では明治以降に「大学」や「科学」という概念を輸入してきたわけだが、その概念の理解を早め、素早く社会に定着させるという意味ではキリスト教との関わりが薄れた時点でそれらの概念を輸入できたことは幸運だったといえる。ところで明治以降に急速に西洋から思想や文化とともに輸入された言葉・概念は他にもたくさんある。例えば「社会」「個人」「人格」「愛」「自由」および「市民」などがあげられる。これらの言葉も「大学」や「科学」と同様に西洋の文化が養われた長い歴史の上にできあがった概念である。しかし、これらの概念が実は日本には完全には理解されていないということが指摘されている。例えば「社会」について阿部謹也氏は本来の意味は日本には浸透しておらず、むしろ「世間」と言い表した方が適切だと述べている<sup>(4)</sup>。社会の構造、運営、将来について責任をもつことを意識し、行動する個人から構成される「社会」ではなく、自分がその集団を運営しているのだという意識を持たない、たいていの場合は受け身の立場に立つ人達により構成される「世間」という意味である。また、佐伯啓思氏は「市民」という言葉を取りあげ、戦後の日本におけるその偏向した使われ方を指摘している。「社会」や「市民」という概念が西洋で生まれたのは、そこに民族、宗教、国家などの力がうずまく複雑な人間模様の、ある意味で残酷な歴史があるからである。“中世においてすでに人々が安心できるのは「家」の中だけであった。「家」はアジール(避難所)であった。そしてこの「家」が拡大したところに「都市」や「国家」があった。この「内」と「外」の区別が、すでに述べたように、例えば「市民」の概念を構成しているのである。”と佐伯氏は述べているが<sup>(5)</sup>、逆に言えば古代からの長い歴史を見渡せば、日本は平和な島国だったために「社会」や「市民」という概念は必要無かったのである。そして、明治維新のきっかけとなった黒船来襲以降、日本は列強諸国が押し寄せて来るという身の危険を感じ、西洋が発明した安全装置である「社会」や「個人」「市民」などの概念を輸入しようとした。さて、現在、我々は列強諸国が武器を持って押し寄せて来るという身の危険は感じなくなったが、様々な社会不安に怯えている。頻繁に起こる凶悪事件、経済グローバルゼーションによる競争の激化、地球規模での環境破壊、初等・中等教育現場の荒廃など、もはや我々の住む「世間」に昔のような安心感はなくなった。やはり、「社会」や「個人」「市民」「自由」などの概念を言葉だけではなく、正しく機能する安全装置として取り入れる必要があるのではないだろうか。

私は「大学」はそのような安全装置を人々に学んでもらうことを目的とした機関であれば良いと思う。そのためには大学生には「自己」を発見してもらう必要がどうしても生じる。これまでの「大学」ではそれができなかったのかというところでもなさそうだ。今回の座談会の参加者は皆、なんらかの形で「自己」を発見し、「社会」や「個人」という概念の獲得を大学時代に自分自信の力で行っていたように思える。しかし、それが可能だったのは日本において「大学」というシステムの機能が非常に曖昧だったからではないだろうか。現在、「大学」というシステムの定義をしないおそうという機運が高まっているが、それならば「自己」を発見するための機関として「大学」を定義し、様々な社会不安に対しての安全装置を強化するシステムとして「大学」を機能させればよいと思う。一橋大学における学生を主体とするゼミナール制度や学長でもあった阿部謹也氏が実践した

「世間」における「自己」の位置づけを知るといようなゼミナールなどは、そのような機能を実現するという意味では非常に効果的に思える。様々な社会不安に対する安全装置を正しく機能させるためには、それを可能とする文化的な土壌がどうしても必要となる。明治維新以降、我々は目前に迫る危機に焦るばかりで、文化がしっかりと根付くような土を耕してこなかったのではないだろうか。その硬い土に鋤を入れ、豊かな文化的土壌を作することを目的とした大学、「自己」の発見を可能とする大学、学生が主体的に行動し学問を発見し、「学問の自由」を実践することができる大学、「社会」「個人」および「市民」の概念を真の意味で学ぶことができる大学を目指すべきだと思う。

平成 11 年 11 月 9 日 (火) 午後 2 時、建築本館地下ゼミ室にて。

## 参考文献

- (1) (“創発”について) マイケル・ポラニー、“暗黙知の次元”、紀伊國屋書店。
- (2) 阿部謹也、“大学論”、日本エディタースクール出版部。
- (3) 村上陽一郎、“科学者とは何か”、新潮選書。
- (4) 阿部謹也、“西洋中世の愛と人格”、朝日新聞社。
- (5) 佐伯啓思、“「市民」とは誰か”、PHP 新書。